座談会シリーズ第四弾！

学生の眼に映る大学改革

●座談会開催日時
十一月九日(土)10時～13時
●座談会開催場所
理学部小会議室
●写真協力
経済学部四年　滝本勇紀

かつて鋭く問われた問題は、「大学とは何か」「学問とは何か」という問題であった。その過程でカリキュラム及び授業改革が論議され、しょせん改良主義の範囲を出ないものであるとの批判を受けながらも、カリキュラム改革が進められてきた。問われたのは、学生、教職員を含め「われわれは今何をすべきか」という課題であった。

大学が、学問の自由、思想の自由を享受しながら真理を追求していくという理念を忘れ去るなら、それは高級知識供給所、高等技術訓練所ではあり得ても、少なくとも大学ではなくなっているはずである。

あれから二十七年。教養教育の在り方が再び問われている。今回の改革の視点はどこにあるのか。ともすれば大学改革は教官サイドの発想で進むことになるが、大学の主役である学生サイドの視点も重視されるべきだと考える。

前号、前々号で教養的教育の特集を組んだ。今号で球を打ち返すのは学生である。

大学への期待と失望

なぜ、大学へ入学したか

渡邊忠信　なぜ、大学入学を志望したか。みんなが行くというよりは、とにかく時間が欲しかった。何をやるのかもまだあやふやなままだったので。この総合科学部というわけのわからない学部で自分のやりたい分野を探して、今は専門の分野をつかんでそれをやっている。

安藤正昭　まず、ゆっくりと考える時間がほしかったということ。

森田愛子　私の場合は、ただ、大学というところに行きたいという気持ちの方が強かった。大学は学問をするところだと。学問の専門機関だと思って、そう期待して入ってきた。それまでの高校までの勉強、あまり興味は考慮されないような勉強の延長とは違うと思って。

水田幸雄　僕は、将来何がやりたいかというのが高校の時点で全然決まってなくて、決まっていないのだから、大学に四年間行って勉強してみたら、僕の将来は何がしたいかという道も定まるだろうと思って。

それで高校のときに、かなり漠然としていたけど法律に興味があったから、法学部でいろいろ法律をやるんならと思って。法律の中でも何がやりたいかというのも、まだその時点で全然決まっていなかった。

牛尾やよい　私は皆さんと多少立場が異なるかもしれません。短大を卒業して社会に出て働くと、日常生活の中での法律に関係するようなできごとで法律知識の必要性というのを感じていたんです。もともと法律に対して関心を持っていたので、そういう意味を含めて第二部に入学したんです。

私が期待していたのは充実した学習内容の提供ということだったんですが、実際二部に入ってみたら、いわゆる昼間の授業とは多少選択の幅が狭いんです。ちょっと失望しました。

大徳朋子　医学部保健学科の看護学専攻に通っています。看護学校との違いは、一般教養が入るかどうかということだけの違いなんですが、やっぱり看護学校に行くよりも大学を出ていた方が就職などに関しても有利だし、看護婦の中でもグレードみたいなのがあって、大学出の看護婦が今すごく増えているということで広島大学にきました。

一年間で一般教養を取ってしまわないと、二年生になって市内から西条まで通うのは非常に大変。実際、私も単位を取り切れなくて、夏の集中講義で市内から毎日通って単位を取りました。私の友だちにも、今、ドイツ語を取りに西条に通っている友だちがいます。そういう点がもう少しどうにかなればいいなと思っています。

安藤　それは最初の時点でわからなかった。落としたら大変なことになるというのは。

大徳　わかっていて、やっぱり専門が一科目もないんです。一般教養だけで時間割が全部埋まってしまう。専門をやる意志で来たのに、入った途端にやることと言えば一般教養ばかり。何となくやる気が失せてしまうんです。それで、結構チャランポランになってしまった面があったと思います。

安藤　最初は専門をやりたいと思って来ている。

大徳　大学に入った当初というのはやる気がありますよね。それでやることが全然自分の興味がないことばかりになってしまって。興味がないことといい

渡邊忠信（わたなべ・ただのぶ）
（学部・学科）総合科学部総合科学科三年
（出身地）福岡県
（今一番興味のあること）卒論、就職、単位
（一言）これまでの学習態度を思い起こせば「穴があったら入りたい」ような私です。勝手なことを言ってますが、気にしないでください。

大徳朋子（だいとく・ともこ）
（学部・学科）医学部保健学科二年
（出身地）長崎県
（希望進路）看護婦か保健婦
（今一番興味のあること）車のこと
（一言）先生に言われて何の知識もなく来ましたが、あらためて一般教育についての理解が深まったと思います。久しぶりに西条に来ましたがやっぱり寒いですね。

うかあまり医学的なこととは関係のない授業を受けるようになったこともあり、結構さぼったりして。

教養と専門性と

安藤　それではここで一つ聞きたいことがある。

最初おぼろ気だけども期待を持って入ってきて、途中からちょっと興味が変わってきた、その変わってきたのはどうしてだろうかというところを聞きたい。

大学に入って違うところが見え始めたとかあるいは大学に入ったおかげで高校までの見方と違うものが見え始めたとか、そういうことはないですか。

生田浩介　工学部の建築にいるんですが、高校のときから歴史に興味があったので、寺とかそういう修復関係の古いことを調べようと思ってきたんですが、一般教養で歴史を取っても、やっぱりおもしろくないんです。歴史は自分の好きなところを好きな時間だけ関わる方がいいのかなと思って。見方を変えると、構造的な方にも興味が出てきたので、そっちに変えて研究してみようと。

西岡弘恵　私は生物が好きで生物生産学部に来たんですが、生物生産では五コースに分かれるというのは知っていたんです。そのコースも入学するときから決めていたんですが、授業を受けるうちに別のコースの方が自分にあっているんじゃないかと思い出して、コース分けのときは、入学のときに決めていたコースではないコースに進みました。

森田　一般教養があるのは知っていたし、そういうものだと思っていました。自分で授業を選んでということが楽しかった。そのときはそれほど不満には思っていなかったんです。一応学問をやりたいということがあって、それほど興味のある科目ばかり取れたわけではないですが、特に不満も感じていなかったんです。それでも今、専門の授業を取るようになってくると、あのときはやっぱり楽しくなかったと思い始めたということはあります。

あのときは、高校と違って自分で選べるということの楽しさであって、授業についてはやっぱり単位稼ぎでしかなかったというふうに思います。

西岡弘恵（にしおか・ひろえ）
（学部・学科）生物生産学部・生物生産学科三年
（出身地）徳島県
（希望進路）食品関係
（今一番興味のあること）ワープロ検定
（一言）教養的科目についてはよく知らなかったのですがよく知ることができました。

教養をどう捉えるか

安藤　これは非常に大きい問題だと思うんですが、大学というのは専門だけやってそれでいいのかどうか。大学を出た人は、少なくともこのぐらいのものは持っていてしかるべきだという世間一般の評価があると思うんです。

その評価に対して、それに応え得るだけのものを身につけて、われわれのサイドから言うと送り出しているのかどうか。ある意味では責任があるわけです。それがいわゆる教養だと思います。その教養というのをどういうふうに考えているのか。

生田　こういう機会があって考えたんですが、直接に役には立たないかもしれないことでも、知識としてやっぱり必要。雑学と言ったらちょっと失礼かもしれないが、そういうところでいろいろ知識がついたなと思います。ものごとを考えることの仕方とか方法論が。

牛尾　私たち二部の場合は、高校を卒業してすぐ入学してくる人もいるし、いったん社会に出て再度入学してくる人など、年齢的にばらつきがあるんです。

例えば年配の人でしたら、英語とかの語学関係に対してはすごく抵抗があるけれど、教養科目の必修だからやらないといけない。でも選択の幅を持たせていただいたら、かなり違うと思うんです。

教養に興味がある人はもちろん教養も取れるし、専門を早く進めたい人は専門に早く進めるというかたちで幅を持たせていただいた方が、二部についてはいいんじゃないかと思うんです。

渡邊　総合科学部は、理念的にも四年間かけて教養をやるような学部だというふうになっていますし、僕もそうだと思っているんですが、その中で自分のやりたい分野というのがあるわけです。それに関連する分野で関連してくる教養の単位もあるし、全然関係ないところで単位揃えのために取るような授業もあるわけです。無駄かなと思ったりする科目も取ったりするんですが、あとから考えると、自分の専門の分野と意外なところでつながっていたりして。それを教養というのかなと思うんですが、単なる雑学とどう違うのかと言われると、ちょっとつらい面もある。幅が広がるというか、いろんな見方を一つのものに対してできることかな、というふうに思うんですが。

安藤　皆さんが大学をとらえた場合に、例えば自分の進路というのをゆっくりと考えてみたいという感じでとらえる場合と、大学は学問をする、研究をする場所であるというふうにとらえてきてそこでそのものを究めようというふうに覚悟を持って入ってきた人と、二部の学生さんなんかは、ある程度の必要性というのに迫られてそのためにはこういうことを勉強しなければいけないと思って入ってこられた人。大体三つぐらいに分かれますね。

では、本来大学というのはどうあるべきかということを考えたときに、例えば広島大学なら広島大学は今後こうあるべきだとかいう意見はありますか。

森田　私は学問をやる場所だと考えていますし、そういう場所であってくれればいいと思います。多分現状はあまりそうではなくて、モラトリアムの期間であるというふうなとらえ方が多数だと思うんです。

一般教養に関しても取りたい人が取ればいい。専門の分野の勉強をしたいと思って入ってきたけれども、自分の専門ばかりやっていると専門バカみたいになって頭がカチカチになってしまうと思ったら、他方面の教養も取ってみようかというのも許されると。自分で選択するという余地があれば、私はいいと思うんです。大学生にもなれば、そのぐらいの判断は自分の選択でやればいいと思います。

安藤　自分が今このくらいの能力があってこのぐらいの力があるというふうに、自分ではある程度評価しているわけですか。

大学は、もっとフレキシブルであっていい

森田　ある程度いろんな授業を受けてみるわけですね。それで、ついていけないということになったら、もう一段下げて受け直してみればいいと思うんです。

極端な意見を言えば、大学を卒業するのは五年でも六年でもかまわないじゃないかと思うんです。やり直したかったらやり直せるような、もっとフレキシブルなものであっていいと思います。

安藤　その場合には、自分で責任を取ってやるということですね。

ほかの人はどうですか。学生が選択の余地を広げるということは、その反面、今度は学生の方にそれだけの責任があります。

森田　変な言い方ですが、ベルトコンベアーに乗ってしまうという選択もあっていいと思うんです。社会に出るための道と大学をとらえている人は、そういうコースを行けばいいと思うんです。

安藤　大学に期待するものとしては、多様性を期待するということですか。

森田　そうですね。

安藤　理想の大学としては、こういうコースもありまたこういうコースもある。そういうコースを自分たちで選べる。もちろん選ぶからには、学生の方にも当然責任がかかってくるわけですが、そういう責任も自分たちが負う。そういうかたちの大学像というのを望みたい、いろんな選択肢をつくってほしい、ということですか。

大徳　医学部の場合は資格を取るための学部なので、最終的には国家試験を受けて看護婦とか医者とか保健婦とか

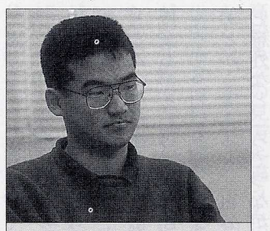
森田愛子（もりた・あいこ）
（学部・学科）教育学部心理学科三年
（出身地）広島県
（希望進路）大学院進学
（今一番興味のあること）心理学の専門分野、大学院入試について
（一言）どのような改革が行われるにしても、一番重要なのは学生自身の自主性だと思います。大学で得られるものの大きさは、本人次第ではないでしょうか。

司会
安藤正昭（あんどう・まさあき）
総合科学部教授
昭和四十八年三月　広島大学大学院理学研究科博士課程後期単位修得退学
理学博士
［専門］脊椎動物の環境適応機構

になるので、国家試験を受けるための必要な科目というのが決まっているんです。だから有無を言わさずキチキチで取るかたちになる。ベルトコンベアー方式と言えばそうなんですが、でもこの場合は仕方がないことだと思うんです。将来の職業は大学に入った時点で決まっていますし、そのための勉強しかやらないので。

水田　法学部では、司法試験から始まっていろいろな資格もあれば、国家公務員、地方公務員を受ける人もいれば、一般の就職にいく人もいる。研究者として残る人もいるから、将来の志望に向けて、やるべきことを大学で学んで、というふうな感じの方法がいいと思います。

安藤　多様性を大学が確保すれば、一応学生のニーズというか学生の希望には応えられるということになる。ただそのときに、どういうふうに多様性を確保するかというのが難しいことになるかもしれない。



水田　幸雄（みずた・ゆきお）
（学部・学科）法学部法学科三年
（出身地）徳島県
（希望進路）公務員
（今一番興味のあること）将来の進路
（一言）これからは大学も学生も変わらなければいけないと感じています。広大の将来に期待したいです。

広島大学のいい点、悪い点

次に二番目の問題に進んでいきたい。広島大学のいい点、悪い点。これは一般的でもいいし、よその大学と比べても結構です。意見がありましたらこの際言っておいてください。ありませんか。非常にいい大学ですか。

牛尾　社会人の再教育の面とか勤労学生に対しての学習の提供の場とか、生涯教育に対して夜間主コースを設けていただいているのはすごくいいことだと思うんです。

移転は終了したんですが、今も夜間主コースは東千田に残っているのに、広島大学跡地というふうになっているんです。「跡地」ってどういうことなのかなと思うんです。大変細かいことかもしれないんですが、実際来年の四月から校舎も新しくなるし、私たちが学んでいるのになんで「跡地」なんだろう。そういう声が少なからずあるんです。

そういうふうに学生に思わせるということは、ある面からいうと、広大の情報提供の欠点ではないかと思うんです。

安藤　東千田町に二部は残っているということをくれぐれも忘れないように、ということですね。

大徳　私が最初に思ったのは、東広島に移転したことが成功だったのか不成功だったのか、ということなんです。

「医学部は市内だからいいね」とか言ってうらやましがられるんですが、私たちは、せっかく総合大学にきたんだから西条のいろんな学部の人と触れ合いたいのに、すごく孤立した感じです。医科大学という感じ。

やっぱり四年間のうち一年間しか西条にいられなかったのが、すごく残念に思います。

水田　僕は逆に、二年から西条に移りましたが、やっぱり広島市内に残ってくれた方が良かった。勉強の面だけではなくて生活の面もそうですし、プライベートな面についてもそうだと思うんです。

いろんな学部が移ってきていろんな学生と交流できたし、キャンパスはかなり広くなって空気もきれいだし。でもやはり、広島市内の方がよかった。

大徳　やっぱり広島大学だったらぜひ同じ場所に。

安藤　総合大学だからということですね。

大徳　そういう期待もあったんです。いろんな考えを持った人が集まると思っていたんですが、孤立してしまうのはすごく寂しい。

安藤　西条移転はあまり好ましくないというか、学生にとってあまりメリットはなかったという評価ですか。

森田　私は広島に住んでいるのでとても困っています。毎日通うのが本当に大変で、東千田なら自転車で十分で行けたのに、なんで二時間もかけてJRとバスを乗り継いで行かなければいけないんだという感じはしています。

それもあるし、何か広すぎる。例えば、理学部の科目、工学部の科目、生物生産学部の科目、そういうものを取りたいと思うと、どこで何をしているのか全然知らないという感じで。今さら建て替えられませんが、学部同士が離れすぎではないか。移動も、はっきり言って二十分の休みでは無理です。総合科学部と教育学部を行ったりきたりするのでもう手一杯だったという感じですから。交流するのも難しいかなと思います。

生田　僕は西条に来て、長期的に見たらいいんじゃないかと思う。今不便だけど、何年か経つとそれなりに発展して住みやすい町になるんじゃないかと。

西岡　私は市内の方で生活したことがないからわからないんだけれど、交通とかが不便で、友だちとかも大学は広島市内にあった方がよかったという話はします。

今、教養的教育は

見えない教養的教育の改革

安藤　それでは、今日のメインの、教養的教育の改革について話を進めていきます。

教養的教育の改革を皆さんはどういうふうにとらえているのか。どういう期待を持っているのか。あるいは、こんなものはどうせだめだという意見を持っているのか。

自分なりに考えて、そして今大学がこういうふうに変革、改革しようとしている教養的教育というものを、皆さんとしてはこういうふうにしてほしいとか、あるいはこんなことをやってもつまらないとか、そういう学生の意見を聞いてみたいと思います。

渡邊　今回の教養的教育の改革。なんで改革しなければいけないのかというところが見えないんです。

於保幸正　その問題については、前回のフォーラムで朝倉先生が説明されていたと思います。

広島大学では大学設置基準の大綱化に伴い、理学部では平成五年度から、その他の学部では平成六年度から新しい教育課程が実施された。しかしながら、広島大学全体として教養的教育の理念や一貫教育の中の位置づけが、必ずしも明確でなかった。

このことの反省が、今回の教養的教育の改革に向かわせたと思います。

安藤　ポイントは、それまでは一般教育と専門教育の二本立てだったんです。それがその枠を取り外して、各大学が自由にやってよろしいという。それを受けて各学部がそれぞれのカリキュラム改革という動きを始めた。

そのときに、広大生の教養というものをどういうふうに考えればいいのかということから発想が始まった。そして教養的教育がまず必要であるという認識、合意を得た。

広島大学はユニバーシティなんだ。ユニバーシティであればユニバーシティとしての一体感があるはずで、その一つが教養的教育であろう。つまり、広島大学共通のものとして教養的教育というものが必要であろう。

それならば広島大学の教養的教育としては何が必要であろうかというディスカッションが始まって、平成九年度から、広島大学としての教養的教育をこういう形で打ち出そうとした。これが大体のいきさつだと思います。

品川哲彦　別の角度から言うと、さっき学生の意見として出た「選択肢を増やしてほしい」という要望を、いわば、文部省は各大学単位で認めたということでもあるんです。ある大学は専門課程の勉強を大きくしてもよろしい。つまり教養課程と呼ばれていたものを圧縮してもよろしい。しかし別の大学は、学生のニーズに応じて教養的教育の方にそれなりの力を入れるのもよろしい。いずれにしても各大学の改革に任せる。

皆さんがおっしゃっているのは、学生一人一人に任せろということなんだけれど、広島大学ではこういうふうな大学に対するイメージがあるので、専門教育と教養的教育の大雑把な割り振りが提案されている。こういうことだと思うんです。

渡邊　今のを聞いていると、自分の内側から出て来たものというよりは、外からきたという感が強いですね。

それと学生側から言わせていただくと、それはもう天から降ってきたようなもので。もちろんその改革によって、それを利用していい方向に持っていくこともできると思いますが、やっぱり学生側の第一印象としては、「なんで変わらなければいけないんだ」と。

特に僕たち、何かごちゃごちゃして、変わっていく中途、ちょうど真ん中にいるわけです。それまで制限があったのがいきなりはずされて自由になってしまった。次の一年生からはまた制限らしきものが加わる。もちろん質が多分違うんでしょう。その中で勉強していけばいいんですが、あまり勝手にやられても困るというのもあるんじゃないか。

安藤　学生としてはあまりいじってくれるなという。

渡邊　その辺じゃないかと思うんです。

生田　別に犠牲になるわけではないが、大学が進歩する上で過渡期にはそれなりの苦労があるので、別にいいと思うんです。過渡期であっても、平穏なときと違って得るものがまたあると思うので。

水田　単位に至るためにはもうそれだけしか取れないという意味で枠がはめ

牛尾　やよい（うしお・やよい）
（学部・学科）法学部第二部法学科五年
（出身地）広島県
（希望進路）就職
（今一番興味のあること）柳田邦夫氏の著書を読破すること。
（一言）広島大学の夜間主コースをみなさんにより理解してもらいたい。

られていると言われたら、納得できない。今までの方が、もうちょっと学生が自由に取れたような気がしてよかったんじゃないかと思うんです。

教養ゼミのねらい

牛尾　例えば教養ゼミ。内容を読んでみたら全学部が担当ということで、法学部の先生も教養ゼミは担当されるわけですね。

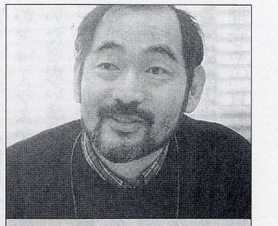
実際、法学部、経済学部の先生は、夜間主コースも東広島キャンパスの授業も持っていらっしゃるわけです。それプラスまた授業が増えるようであれば、授業内容の希薄。そういうのがもしあるとすれば、それは決して学生にとってはプラスになりにくいのではないかと感じたんです。

於保　教養ゼミについては、教官のためのガイドラインができています。それを読めば、何を目的としているかが書かれています。

要は、自主的に学習ができるような学生を育てたいということが最初なんです。次に、ものの考え方についていろんな考え方があるということを理解してもらう。それから教官と学生、また学生相互のコミュニケーションを図るというようなところが重要なポイントだろうというふうに思っています。

教官と学生とのつながりをなるべく深めていくためには、それぞれの学部に入った新入生が、それぞれの学部の先生と最初から結びつきを持って、どういうふうに大学で学んでいくかということを学生にとってみれば有益ではないかと思うんです。

教官は、より負担が増えるから、他の授業科目に対しては安易に流れるのではないかという危惧の念を持っているかもしれないけれど、それはまた別の問題だと思います。授業はしっかりやらなければいけないと教官自体も思っていますから、そういうことは多分心配ないだろうと思います。



於保　幸正（おほ・ゆきまさ）
総合科学部教授
昭和五十四年三月　東京大学大学院
理学系研究科修士課程修了
理学博士
［専門分野］地質学

西谷元　実際問題として、法学部、経済学部の教官数というのは、全学部の中でも一番少ない方になります。ところが学生数は、両方あわせると各学部一学年三百名近くいます。

それを、今度教養的教育の改革だということでいろんなことが出てきます。教養ゼミのことに戻しますと、結局教官全員の中でどれだけの人が教養ゼミで教えなければいけないかという比率をとりますと、ものすごく高いわけです。大体十人クラスでつくると、七～八〇パーセントの教官が毎年教養ゼミに関わらなければいけないことになる。ところが、例えば総合科学部だったら一〇パーセントを切る。

そうすると、法学部、経済学部の先生が、西条で教え、東千田で教え、専門を教え、かつ教養ゼミをやれということになりますと、人間は一人ですから、教育内容に関してはレベルを絶対落とさないように各クラスでやりますが、結局その移動に関してからだがしんどくなるとか、それは絶対出てきます。

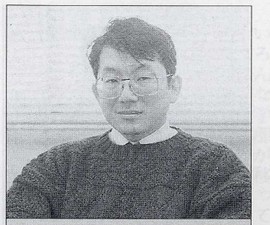
時間割もやっぱり組めない。二か所にいるわけにはいきませんから、どうしても組みにくくなる。例えばゼミをやるときに、どうしても専門の時間はここに組みたい、一年生用だからこの時間に組みたいと思っている。それが組めないというなことも出てきます。

実際、今起こっていることです。

だから牛尾さんが言われたようなことは、教育内容としては起こってはいけないし、起こらないようにしますが、実際やる方からすると、希薄化というのではなくて、先生のリソースがもう払底しておりますので、サービスを落とさないようにするためにはどこかに無理をかける。学生にも無理がかかるでしょうし先生にも負担がかかる。

安藤　夜間主コースの学生としては、今回の教養ゼミに期待を持っているの。

牛尾　どうなんでしょう。現実として、あまり知られていないと思うんです。



西谷　元（にしたに・はじめ）
法学部教授
昭和六十三年三月　一橋大学大学院
法学科博士課程後期単位修得退学
［専門分野］国際法

パッケージ別科目群と理念

安藤　今度の教養的教育の改革の中で新しい名前が出てくるのは教養ゼミとパッケージ別科目群という名前。

次に、パッケージというのはどういうものなのか。なんでこういうことをやったのかということについて話してもらいます。

品川　教養的教育の目標というのは、最初に前専門性。すなわち専門の勉強に進むために必要な基礎知識、あるいは、専門的な勉強をするための態度。例えば教養ゼミでやろうとしているようなことですね。もう一つは非専門性。単に専門だけの知識を身につけるのではなく、もっと広い視野でものを見ること。三番目は学際性・総合性。これは「さまざまな分野には意外なつながりがある。自分はそれを専門にしていないけれどもいろんな立場の人の意見を聞いて問題を考え直そう」という、そういう考える態度を身につけること。以上、三つの目標があります。

教養的教育科目にはさまざまな種類があるからそれぞれ目標を異にしているわけで、パッケージ別科目というのは、そのうちの非専門性と学際性・総合性をひたすら目標にします。そのほかの個別科目（これまであった哲学とか生態学とかいったものですが）は、その授業を受ける人によっては前専門性になります。

例えば、基礎科目として学部、学科がそれを指定している場合には、前専門性になります。しかし、仮に医学部の人が哲学なりなんなり自分の興味でやるとすれば、これは非専門性。あるいは学際性・総合性ということをめざすということになります。一応このように色分けしたわけです。

なぜ色分けしなければならないのかというのは大きな問題です。一つは、今言った目標でさえ、これまでは一年生に伝えようとする努力を、大学側があまりしていなかった。一年生がどうやって自分の勉強を組み立てていくかと言えば、先輩や親戚の人から聞いたり、「誰々先生のが取りやすいよ」とかの一種のうわさで動いているんです。これはなんて言いますか、授業というものを商品だとすれば、大学は売り手側と言いますか提供する側の努力を怠っているわけで、今度の改革では「教養的教育ではこういうことをやるんですよ」とまず言いたい。この「こういうことをやるんですよ」を整理していった結果、三つの目標が出てきたわけです。

その三つの目標に応じて「こういう科目はこの目標でやりましょう」とはっきり宣言していったら、改革案にあるように授業科目が細分化していった。

ただし細分化したとはいえ、学生の選択の自由をすっかり奪って、この科目とあの科目を取りなさいというふうにぎゅうぎゅう詰めにしたかというと、そういうわけではありません。パッケージの中で学生の自由選択の余地はもちろん残しています。おおざっぱに言えば、そういった方向で教養的教育改革が行われようとしていて、その中でパッケージ別科目と個別科目は、今言った方向でつくられた科目だということです。

安藤　従来のそれぞれの学問、例えば哲学、生物学とか言っていたそういう個別の科目であったものをパッケージにした。パッケージというのは、ある科目を三つ連ねて、そこを一つの同じ思想でもってつなぐ。これがパッケージになるんですね。

品川　思想というか理念と言うか。金平糖というお菓子がありますが、あのイメージを思い描いてもらうといいんです。例えば核となるパッケージ別科目の中で、生物学なら生物学という分野で興味が持てた。それなら個別科目に生物学に関連する科目があるならそれを取ってみようじゃないか、というふうに金平糖の角を伸ばしていく。

これまでは、教養的教育で学ぶことがらをどうやって一人一人がまとめていくかというのは、すべて学生個々人に任せていました。それだからこそやれたという学生もいるし、だからこそ散漫になってしまったという人もいるかもしれません。パッケージというのは、学生の選択の自由と散漫にならないという二つのベクトルを両方あわせようとして、今計画されているかたちになったということです。

ただし、教員側にとってもそれなりの努力はいります。パッケージというのは、今言ったように非専門性が目標ですから、自分が専門にしていることを専門にしない学生に向かって伝えるわけです。はっきり言うと、教えるときは専門が同じ学生の方が教えやすい。けれども、あえてそうじゃない科目をつくりました。教養科目を取りにいっ

品川　哲彦（しながわ・てつひこ）
総合科学部助教授
昭和六十二年三月　京都大学大学院
文学研究科博士後期課程単位修得退学
［専門分野］現象学的哲学、生命倫理、倫理学

たけれども、結局、教師の専門のことであって話がわからない。あの人たちは自分の専門のことを伝えているだけであって、私になんの関係があるんだというような不満が教わる側にはあるんじゃないかと思います。それをこのパッケージ科目で是正する方向で改革しようと考えているわけです。

安藤　ちょっと質問ですが、パッケージに括ろうとした精神はどういう精神なのか。

品川　一つは、やはりその授業科目の目標をはっきりさせるということです。

例えば、仮に何々学という名前の授業科目を一般教養でやっているとしても、将来的にはその何々学を専攻するような学生に向けてやろうとしているのか、そうではないのか。その辺がこれまでの一般教養の各科目の中ではあまりはっきり区別されていません。

それからもう一つは、パッケージの理念に盛り込んだようなあるテーマを追いかけない限りは幅広い視野というのはできてこない。その一つのテーマ、理念をパッケージそれぞれで追求していって、「こういう科目はこういうふうな関わり方をするんです」と受講生に道しるべをする。

例えば、「科学技術と環境」というパッケージに倫理学や文学の分野が入っています。倫理学とか文学という科目をそれぞれ別個にやっている限りには、別に環境問題に触れなくてもいい。しかしこのパッケージの中に倫理学とか文学とかを入れていく以上は、当然その科学技術と環境という問題に触れるような切り込み方でその授業を展開していく。そうすると、これはまさに非専門性ということにつながるわけですが、こういう切り口でなかったら倫理学も文学も興味がないという学生に、一見、全然無縁に思えるかもしれないけれど、こんな分野でもこんなことをやっているんだということを伝えることができる。それは、今回の改革のプラスになるところではないかと思います。

教養的教育改革というのは、おそらく二つの極があると思うんです。一つはまったくテクニックの涵養をめざす。例えば自動車の免許を取るのに自動車学校に行くとか、パソコンを使うとか、英会話ができたり英作文ができるというのは、もちろんそれを使って世界が広がるんだからテクニックだけとは言えないんだけれど、それだけとればテクニックなんです。そういうテクニックは、おそらくそれぞれの学部・学科にあるでしょう。

もう一つの方の極は非専門性と学際性・総合性。ところが、これに対して学生になんでそんなことが必要なのかと聞かれますと、一番弱いところです。

まあ、元をたどれば、教養的教育には、一つには昔から言われているノブレス・オブリージュというんですか、高い位置にある者ほど負担が大きいとか責任を果たさなければならないという方向もあると思うんです。つまりいろんなことを知った人間は、それだけその社会の中で知ったことを活かす責任があるという方向がある。単にテクニックを身につけるだけなら、その人は就職に有利だとかあるいは同じ目標をめざしている同業者の中で有利だということにはなるかもしれません。

しかし大学教育というのは、人を育てて、その人から社会的に還元することも要求されるわけです。そうすると、「広く知る」、つまり単に一つの専門の中で使われる側ではなくて、もっといろんな分野に連絡が取れて、かなり広い仕方で問題に関われるような人間を育てなければならないという部分があるんです。

しかし、それはまったくある意味ではきれいごとでして、今度の教養的教育改革でいろんな大学が苦労しているところです。学生の側にも当然要求があります。例えば「自分たちはテクニックの方を教えてもらえば結構だ。広い視野と言われても、そんなのは難しいからどなたか考えてください」ということを要求している学生だけであれば、そこの教養的教育はどうしてもテクニックの方にいきます。また、学生だけの責任だけでもない。教える側に「もう自分は自分の専門と同じ学生を育てるだけにしか興味を持たない。自分の専門を、ほかの専門をやろうとしている学生に伝える気力もない」というような先生が集まっていれば、これは提供側からしてもテクニックの方にいきます。

今度の改革がどうなるかというのは、いくら制度をつくっても内容的なことはやってみなければわからない。おそらく広島大学の改革でも、ほかの大学と同じように、テクニックと広く知るという両極端のあいだに学生側の要求と教える側の要求との接点ができて、最終的に内容は決まってくると思います。

しかしただ、精神論だけでやってはいけない。制度としては、例えば、パッケージ科目には、前専門性の方よりも学際性・総合性あるいは非専門性の方に寄って改革をしようとするベクトルが現れている。しかしそうではない科目もある。例えば、基礎科目は前専門性の方に明らかに寄っているということになります。

外国語科目の諸問題

外国語と多様性

西田正　まず一番根本的な問題は、なぜ改革をしなければいけないかということ。それは、改革の前に今までやってきたことを客観的に評価し、何が問題であって何がよかったか、そのいい点悪い点を明確にし、そして悪い面を解決していくというのが改革であるというふうに考えています。

その際、非常にいい改革をしようとすれば、行き着くところは、やはり設備が足りないとか教官が足りないとかという問題です。ですから改革といっても、ある程度限度があるというような気がするんです。

外国語科目は、新しい要綱では共通科目として位置づけられている。つまり新しいカリキュラムではかなり重要な科目だという設定が最初になされていると思います。

多様化という話が出たと思いますが、多様化に対して、つまり学生の多様なニーズに対してどういうふうに大学がそれを受け止めていくかという、これも非常に根本的な問題だと思います。

それからもう一つは、授業の中でやれることは、どの科目であっても限界があると思います。時間的な制限があるし、あるいは年限的なこともある。ですから外国語の場合は、平成九年度から、外国語教育研究センターが新しい組織としてできるわけです。情報教育には情報教育研究センターができるのと同じように、基本的な考え方は、現在やっている授業のほかに、自主的に学生が学習できるような場を提供しよう。そのための一つの役割をセンターに持たせようということになっている。平成九年度からは、外国語学習が大きく変わるんではないかと思っています。

多様性ということに関しては、初修の外国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語に朝鮮語が加わります。さらには「初修外国語の世界」のほか新しい授業科目ができます。これも多様化に向けての授業の設定ではないかと思うわけです。

今、どこの大学でも外国語科目が非常に期待されているんです。しかし、重要な科目であるという位置づけをしたのなら、教師側だけの努力だけでなく、大学全体でサポートしていくという体制が整わないと、外国語の改革はうまくいかないんじゃないかと個人的には思っているんです。

生田　僕はヒアリングを取ったんですが、教室よりも総科のブースで受けて、かなりよかったと思いました。

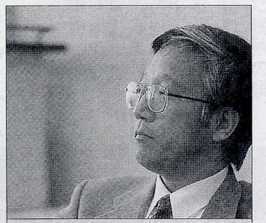
西田　英語の授業が技能別になりますとそれに必要な教室がいると思うんです。例えばリスニングの技能を伸ばすためには、大きな教室で先生がテープを持ってきて授業をやってもあまり効果がないんです。

技能別になると、やるべき内容がかなりはっきりしてくるという面はいいんですが、同時に、それに見合った施設があるかどうかが非常に大きな問題だと思います。

私は、教養的教育全体の問題として、学生諸君には、なぜこの授業をやらなくてはいけないか、はっきりとした理由を見つけるのが難しいと思うんです。教養的教育というのは、あとになってからその位置づけがわかるということで、一年生にとっては、なぜこれを取らなくてはいけないかという疑問は常に起きてくると思います。

外国語についてもそうだと思うんです。結局やらなくてはいけないから、四単位は必修だから仕様がない、というような気持ちが強い。「しまった。もう少しドイツ語をやっておくべきだった」とか「フランス語をやっておくべきだった」とかいうようにあとから気

生田　浩介（いくた・こうすけ）
（学部・学科）工学部第四類（建設系）四年
（出身地）兵庫県
（希望進路）大学院進学
（今一番興味のあること）卒論



西田　正（にしだ・ただし）
総合科学部教授
昭和四十六年三月　広島大学大学院
教育学研究科修士課程修了
［専門分野］英語教育学

づくことが多い。

英語の場合でも、専門の授業で読む力のなさを知るとか、外国から来た学生に自分の言いたいことが言えなかったとかいう場面に遭遇して初めて、「やらなくてはいけない」、「もう少しこういう面をやるべきだ」という反省が生まれてくると思うんです。

ですから、先ほど言ったようなセンターがそういう役割を果たすんじゃないか。つまり学習の動機や意欲に目覚めた学生を受け入れる受け皿をつくったことが一つの改革に入るかと、僕自身は思っています。

夜間主コースの外国語教育

牛尾　少人数クラスというのは、私は受けたことがないんですが、大体何人ぐらいでしょうか。

西田　少人数という言葉が一人歩きしているところに危険を感じます。

私たちが考えている少人数というのは、大体五十人とか四十人というのが普通のクラスサイズですから、それを少し少なくして三十五人ぐらいかなというところで、それをあえて少人数と言っています。

牛尾　私たちが受けたときはすごく人数が多かったんです。記憶しているだけでも五十人以上はいたと思うんです。七～八十人ぐらいいたんじゃないかと思うんです。今実際一、二年生の話を聞いてみるともっと多くいるみたいで、一クラスで百二十人とか多いところは百六十人で受けているというふうに聞いたんです。これで外国語が習得できるのかなと疑問に思ったので、西田先生がさっきおっしゃった少人数コース、どの程度が少人数ということなのかということと、夜間主コースの先生方は大変だと思うんですが、もうちょっとクラスを分けて外国語とかをやっていただきたいと思うんです。

西谷　数字を言うと、全クラスのうち約半分が百人以上で、七割が九十人以上のクラスになります。最大は百六十人です。

西田　それについてはちょっと説明がいると思うんです。それだけの学生が聴講の登録をしたかもしれませんが、しかしそうなるのは、一つは、途中でやめてしまう学生が多くて、受付けの時点では百二十人であっても、夏休みを過ぎると六十人とか五十人とか半分ぐらいやめてしまう。そういう学生が実は多いんです。その学生がさらにまた次の年に新たに聴講の手続きするわけです。ですからそういう面もあるということを頭に入れておいていただきたい。ですが、確かにそれを差し引いても、西条並みになっていないことは事実です。

それから先ほどの双方向授業。こういう方法が外国語の場合でも実現すればいいとは思うんですが、外国語の訓練というのは、その場に先生がいて授業をやるというのが今までわれわれの慣れている学習、あるいは教え方です。双方向の授業がうまく使えないという面もあるのではないか。

それと、これは弁解でもなんでもないですが、私たち英語担当者は、夜間主コースのみならず歯キャンパスの医学部、歯学部、つまり三つのキャンパスをまたいで授業に行っています。それが現状です。これが、あるところへしわ寄せしているという面もあるので、あえてここで言わせていただきました。

安藤　話としてはまず理想というものと、授業をしようと思えばスタッフがいる。スタッフや設備は金のかかる問題だし、ある程度の限界というかそういう縛りの中で、よりよい大学をめざそうとして今回の大学改革は動いている。そこのところはご理解願いたい。それから学生の方としては、だからといって遠慮することは何もないので、こういうふうな大学にしてほしいというのを、今から先もどんどんと出していってほしいと思います。

時間がきましたのでそろそろ終わりたいんですが、最後にこれだけは言わないと帰れないという人がいましたら言ってください。

生みの苦しみ

渡邊　今日いろんなお話を聞いて思ったんですが、パッケージにしても、教官と学生が両方関わってくる面がありますね。

英語にしても、さっき少人数クラスの話も出ていましたが、人数が少なければ学生が主体的に勉強するかというと、そうでもないんじゃないかと思うんです。百人というのは大きすぎますが、三十五人程度のものでも、教官がその学生をうまく動機づけするとか積極的に発言することをプラスに評価していくとかで、人数は多くてもそれなりの指導はできるだろうし。学生側としても、少人数で回ってくる順番が早くなってしまうからいやいや勉強するというのではなくて、やっぱり自分から英語あるいは外国語を勉強していく必要があるだろう。

要するに改革のいろいろな動きがあって、それを教官の側でもよりよく教えていく努力はいるし、学生の側でもよりよく学んでいく努力はいるんじゃないかというふうに思います。

安藤　お互いにどっちも苦しまなければいけないということですね。学生も勉強を苦しむ。先生方は講義というか授業をすることに苦しむということが、今しばらく続くようですね。